

“貴重な”経験をふりかえる

辰野 直子

2004 年の末も押し迫った頃、この人環・総人図書館においても“今年の漢字「災」”を象徴するような出来事が起こった。図書館資料の水損である。その詳しい経緯については他の方に譲るとして、ここではその後の対応とその中で感じたこと考えたことをざっと記したい。

12 月 24 日、朝。いつものように出勤すると、明らかにいつもと様子が違う。濡れた床、その床をふく人。聞けば、水道管が破裂し水が漏れたという。すぐに地下の書庫に行くと、びしょ濡れの資料、ビニール袋がかけられた書架が目に入った。濡れた資料を目にした時は衝撃、というか本当に悲しく涙が出そうな何とも言えない気持ちになった。水漏れが発見された夜中に、連絡のついた職員が来て濡れた資料を避難させて下さったという。職場から近い距離に住む私を含め連絡のなかった職員も多く、緊急時の連絡体制の不備を痛感した。

水に濡れた資料を目にして悲しいと思っている場合ではなく、すぐに濡れた資料を 2 階の閲覧室に運ぶ作業にとりかかった。2 階に運んだはいいが、その後はどうすればいいのか。資料を救いたいという思いはあるものの、こういった災害時の対処に対して無知であることを自覚した。

濡れの度合いによって資料を分け、濡れの度合いの高い資料に吸水紙を挟む作業にとりかかる。1 頁毎に吸水紙を 1 枚 1 枚挟む作業は初めての経験であったが、予想以上にたいへんであった。しかし、とにかく少しでも多くの資料が、少しでも元の状態に近い状態に戻る事を祈りながら、黙々と作業をしていたように思う。

多くの方々の協力もあって吸水紙を挟む作業は順調に終わり、冠水資料は、乾燥後、年明けに燻蒸に出され今は戻ってきている。初動が早かった事もあってか、それらの資料を見る限りでは、幸いに比較的多くの資料が冠水前に近い状態になっている。

今回の件を改めてふりかえて、とにかく、ふだんから(水道管の)点検がきちんとできていれば防げていたのにという後悔の思いにいきつく。そして、

うちの図書館は大丈夫だろうと思っていた自分自身の意識の甘さを痛感する。さらに、こういった災害が起きた際の対処について、これまでほとんど考えてこなかったという反省。

今回の件は、本当に起きてはならない災害だったと思う。が、この災害のおかげで、冠水資料に対する対処法を身をもって知る事ができた。そういう意味では“貴重な”経験になった。さらに、これを機に、ふだんから防災に対する意識を高め、災害時の対応について考えられるようになれば、それはもっと“貴重な”経験だったといえるだろう。災害はそうそう起きるものではないが、だからといって万一起きた際の対処法を考えなくてよいという事ではない。この「バベルの図書館」が、多くの人々と経験を共有する、また防災や災害時の対応について考えるきっかけとなれば幸いである。

締め括りに、今回の件を機に目をとおした文献から、IFLA (国際図書館連盟, International Federation of Library Associations and Institutions) がまとめた「図書館資料の予防的保存対策の原則」(Principles for the Care and Handling of Library Material) より、印象に残った言葉を。

「深刻な被害をもたらした災害の多くは、お金をほとんどかけずとも、未然に防ぐことができたはずである。予防は治療よりも優れているだけでなく、非常に安上がりである。」

(エドワード・P. アドコック編集；国立国会図書館訳『IFLA 図書館資料の予防的保存対策の原則』(日本図書館協会, 2003))

最後に、今回の災害に際して、ご協力頂いた多くの方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(たつの なおこ, 人環・総人図書館参考調査掛)